

文学 <二>

文学史 〜夏目漱石〜

今回の学習のポイント

「夏目漱石」について知ろう！

国語監修・執筆

刑部 紗也華

夏目漱石（なつめ・そうせき） 慶応三年（1867）〜大正五年（1916）

東京出身。本名、金之助きんのすけ。小説家、英文学者。近代に生きる人間の自己の問題を追及し、近代日本文学の代表的作家となった。晩年は「則天去私そくてんきょし」（小さな自分を去って大きな天に身をゆだねる）の境地を求めた。

（※芥川龍之介も師と仰いだ文豪である。）

代表作 『坊っちゃん』『吾輩は猫である』『草枕』『それから』『こころ』『明暗』など

生い立ち

漱石は生後まもなく里子に出され、また別の家の養子になるなど、幼少期は不遇でした。十四歳のときに漢学を学び、後年の文学・思想の核となる東洋的美意識や儒教的倫理観を自己の内に育てました。その後進学のために英語を学び、二十一歳で第一高等中学本科に入学、二十三歳で帝国大学（後の東京帝国大学、現在の東京大学）英文学科に入学しました。しかし、イギリス留学の中で日本と西欧の圧倒的な隔たりへの衝撃などによる心の溝を埋めきれず、孤独感も重なり、ひどく精神を病んだと言われています。

ペンネームの由来

「漱石枕流ちんりきゅう」という四字熟語から付けられました。

「漱」は、「嗽」（しゅうがい）という字に似ています。水で口をすすぐこと。でも、石で口をすすげるはずがない。石に枕し、流れに口すすぐという意味の「枕石漱流」ならば意味が通る。でも、「漱石枕流」と言い間違えた人が、「石で歯を磨き、流れの水で耳洗うという意味だ」と無理な反論を試みた。

このことから、「こじつける人」とか「頑固なまでに自分の非を認めない人」という意味になりました。

俳句「董程すみれな小さき人に生れたし」(明治三十年)

「董や自然は権威や権力などというのを全く眼中にしていけない」漱石はそういう自然の一例示として「董のような、小さな人になりたい」という自分の生き方の指標にしたのでしよう。

ちなみに、漱石は一高以来の友「正岡子規まさおかしき」らとの親交を深め、句作に熱中していました。

長編小説『吾輩は猫である』(明治三十八年)

中学の英語教師苦沙弥先生の下に集まる門下生、美学者迷亭めいてい、理学者寒月かんげつ、哲学者東風とうふうらの生活や世相を、飼い猫の目を通してユーモアを交え、風刺的に描いた作品。日本の外観的な近代化に対する漱石の文明・社会批判が読み取れます。

中編小説『坊っちゃん』(明治三十九年)

松山中学在任当時の体験を背景とした初期の代表作。

物理学校を卒業後ただちに四国の中学に数学教師として赴任した直情怪行の青年坊っちゃんぼんちゃんが周囲の愚劣、無気力などに反撥はんぱつし、職をなげうって東京に帰る。

主人公の反俗精神に貫かれた奔放な行動は、滑稽と人情の巧みな交錯となつて、漱石の作品中最も広く愛読され、近代小説に勧善懲悪の主題を復活させた傑作と言われています。

ちなみに、漱石は『坊っちゃん』を一週間という驚異的なスピードで書き上げたと言われています。このような執筆状況から『坊っちゃん』の魅力は、「一気呵成いっせいかせいな創作力の奔出ほんしゅつから生まれた歯切れの良い文体のリズム」と言えるでしょう。

『I love you』を訳すよ……

漱石は「I love you」を「月がきれいですね」と訳したと言われています。

「月がきれいですね」と言い、「そうですね」と返ってくる。二人が美しい対

象物を眺めながら、美しさを共に感じ、心を通わすことができれば、そこに愛は確認できる。あえて言葉にせずとも、それだけで十分な意志疎通となる。

漱石はそこに愛を表現したのではないのでしょうか……

まとめ

漱石はとても真面目な人間であり、親しみやすい文豪です。人間としての漱石に魅力を感じるファンは今も多くいます。小説家デビューは遅いものの、漱石は数々の名作を世に発表しました。

未読の方は、入門編として『坊っちゃん』を読んでみてはいかがでしょうか？
ロールプレイングゲーム感覚でサクサク読めるのでオススメです。